



紙ゆえに深まる

凧良ゆう

わたしはひとり住まいで、その上、すつきりこぢんまりしている空間が好きなので、小さな家のほうが性に合っている。けれど本の置き場所にだけは常に頭を悩ませている。わたしの小さな家を、紙の本は常に圧迫してくる。

今は電子書籍という便利なものがあって、どこでも読めない空間に幻の本をしまっておける。幻だから、しまっておくという言い方も正しくないかもしれない。

とにかく場所がない——ただそれだけの理由で電子書籍を買うようになったけれど、これが意外に快適だった。疲れているときは字を大きくできるし、旅行先でも好き放題に読める。ご飯を食べながら、迂闊に醤油を飛ばしても画面を拭けば汚れは取れる。古びず、便利で、な

にこれらの美点を使うほどに色褪せていくのを不思議に感じていた。

わたしは世界にひとつの、わたしだけの本を数冊持っている。どうしようもなく孤独を感じる時、恋をしたとき、あるいはなんでもないと、繰り返し何度も読む愛する物語たち。ベッドに持ち込んで、そのまま眠って折れ曲がったページがある。お風呂でも読むので全体的に湿って、やんわり波打っているページがある。すごいものになると、本を持つ指の形に表紙が丸く破れている。もう本当にほろほろだ。

愛しているなら丁寧に扱いなさいという声が聞こえてきそうだけど、紙は繊細で、窓際に置いておくだけで傷んでいく。光が当たる場所に並んでいた本の背表紙が紫外線にやられ、すべて青色に退色してしまった図書館のニュースを見たことがある。本にとっては良い環境とは言えないけれど、あれはあれで浅い海の底に並んだ本のように美しいと感じた。なににも影響を受けない強いものに、わたしは美を感じない。

他人にとってはただの汚い傷んだ本たちは、わたし自身の記憶と重なって物語の枠をはみ出してくる。この感覚は紙の本でないといわれない。便利に清潔に管



なぎらゆう●滋賀県生まれ。漫画家志望を経て、2006年『小説花丸』に中篇『恋するエゴイスト』掲載。07年『花嫁はマリッジブルー』で作家デビュー。以降、BL小説を精力的に刊行。17年、非BL作品『神さまのビオトープ』上梓。19年8月刊行の『流浪の月』で2020年本屋大賞受賞。以降『わたしの美しい庭』で山田風太郎賞候補、『減びの前のジャングリラ』で本屋大賞2年連続ノミネートといま最も読者の支持を集める作家のひとり。

理された場所では生まれづらい、めんどくさいがゆえの魅力という意味では恋と似ている。

先日、ワインバーをやっている友人から、桜を見においでと誘いがきた。友人の店の窓からは川と桜が見下ろせる。夜の中に淡く浮かび上がる桜は盛りをわずかに過ぎていて、弱い風にも花びらが散って、くるくる回転しながら川面に落ちて流れていく。

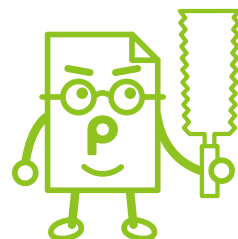
夢みたいに儂い風景を眺めながら、子供のころ紙吹雪を散らして遊んだことを思い出した。はらはらと散っていく様子を愉しむために、ちまちまと紙を切り刻んでいく。手間がかかるわりにほんの数秒で散り終わり、ゴミをまき散らさないと叱られるオマケまでついてくる。労多くして功少なし。でもとても楽しい遊びだった。

わたしは手間のかかる理不尽なことが昔から好きで、たぶん、あまり成長しないまま大人になってしまった。だからきつと小説なんて書いていられるんだろう。

ペーパー君のつ・ぶ・や・き 活動

伐ることによって育つ森がある。

木を伐りすぎると森が減る。でも、何もしないと隙間なく木が生えてきて、日当たりが悪くなってしまうんです。森がすくすく育つためには、木を伐ること(間伐)も大切。さらに、そのとき伐った木(間伐材)は無駄にせず、紙づくりの原料にも使われているんだって。



紙のことをもっと伝えたい。詳しくは、「ペーパー君のつ・ぶ・や・き」WEBサイトをご覧ください。

<http://kamitsubu.com/>



次号は6月3日号です。

提供 ● 日本製紙連合会 <http://www.jpa.gr.jp>

京都国際マンガミュージアム メインギャラリーにて

Photo : Shiro Miyake